# アロイージアとの叶わぬ恋

大阪モーツァルトアンサンブル　武本　浩

1777 年 9 月 23 日、21 歳のモーツァルトは大司教領ザルツブルクの宮廷音楽家を辞して、ミュンヘン、マンハイム、パリに職を求めて母と二人で旅立った。ミュンヘンではバイエルン選帝侯マキシミーリアーン 3 世ヨーゼフに「ザルツブルクとすっかり縁を切って選帝侯にお仕えしたい」と懇願したが、隣国のザルツブルク大司教との関係悪化を恐れたバイエルン選帝侯から「席がないと」断られたので、10 月 11 日、父の故郷、アウグスブルクに向かうことにした。アウグスブルクに着くなり、クラヴィーア制作者のシュタインを訪ねる。「もしかして、モーツァルトさんじゃありませんか？」と言うシュタインにモーツァルトは「ミュンヒェンのジーグルさんの不出来な弟子で、トラッツォーム（Trazom、Mozart の逆さ読み）と申します。」と冗談を言って、新作のクラヴィーアを弾き始めるが、旧知の子息であることを確信したシュタインは十字を切ってモーツァルトを抱きしめた。この新しいクラヴィーアの性能を 10 月 17 日、ザルツブルクの父レーオポルトに宛ててかなり興奮気味に報告している。

*シュペート（レーゲンスブルクのピアノ制作者）のクラヴィーアがぼくの一番のお気に入りでした。でも今ではシュタインのが優れているのを認めなくてはなりません。レーゲンスブルクのよりも、ダンパーがずっとよくきくからです。強く叩けば、たとえ指を残しておこうと上げようと、ぼくが鳴らした瞬間にその音は消えます。思いのままに鍵に触れても、音は常に一様です。カタカタ鳴ったり、強くなったり弱くなったりすることなく、まったく音が出ないなどということもありません。要するに、すべてが均一の音でできています。そのピアノは、一台 300 フローリン以下で売ってくれないのはたしかですが、彼がつぎ込んだ苦労と努力はお金で報いられるものではありません。彼の楽器が特にほかのと変わっているのは、エスケープメントがつけられていることです。それについて気を使っているのは、百のメーカーにひとつもありません。*

今から 300 年以上前、メディチ家というイタリア・フィレンツェの美術、音楽の大パトロンに仕えていたクリストーフォリにより発明されたピアノは、各地で発明と工夫がなされた。シュタインの新しいピアノには跳ね上げ式のアクションにエスケープメント装置がとりつけてあった。10 月 22 日にフッガー伯爵家の広間に完成したばかりの 3 台のクラヴィーアが持ち込まれ、音楽会が開催されている。その模様が父への手紙に記されている。

*さて、パパ、シンフォニーのあと、初めに演奏したのはなんだと思いますか？――『三台のクラヴィーアのための協奏曲』です。デムラー氏（司教座聖堂のオルガニスト）が第一クラヴィーア、ぼくが第二で、シュタインさんが第三でした。・・・（中略）・・・たいへんな喝采とどよめきがありました。シュタインさんは驚きのあまり眉をしかめ、顔をゆがめるよりほかはありませんでした。デムラー氏は笑いがとまらなくなりました。*

この <u>3 台のクラヴィーアのための協奏曲 第 7 番 へ長調 KV 242</u> は、1776 年 2 月、ザルツブルクの貴族ロードゥローン伯爵夫人とその令嬢、アロイージアとジュゼッピーナの 3 人がチェンバロで演奏するために作曲された。ジュゼッピーナの技術が未熟だったため、第 3 ピアノのパートは平易に書かれている。モーツァルトは、その後 <u>2 台用に編曲</u>して、1780 年 9 月 3 日、姉のナンネルと演奏した。ヴィーンに移住後も、2 台用の編曲版で弟子のヨゼファ・フォン・アウエルンハマー嬢とたびたび演奏した。第 1 ピアノを弾いたアウエルンハマーが、1810 年頃にナンネルに宛てた手紙で、ウィーンの貴族の館でモーツァルトが演奏したピアノ協奏曲について回想している。それによると、モーツァルトは聴衆を背に向けて蓋を外したピアノに座り、オーケストラはピアノの先を取り囲むように半円状に配置されていた。当時のクラヴィーアには蓋を支える棒がないことが多く、室内楽を演奏する時は蓋を閉じ、協奏曲を演奏する時は、蓋を外していたことが、同時期に描かれた絵画からうかがい知ることができる。

10 月 26 日、アウグスブルクを出発したモーツアルト母子は、ネルトリンゲン、ハイデルベルクを経てマンハイムに到着した。10 月 29 日のことだった。マンハイムにはプファルツ選帝侯カール 4 世フィリップ・テオドールの宮廷があった。カール・テオドールは私財を投じて宮廷楽団に著名な音楽家を各地から招聘し、当時マンハイム楽派と呼ばれるドイツで最高水準の音楽家が集まる都市を築きあげた。作曲家でありヴァイオリン奏者のクリスティアン・カンナビヒ、フルート奏者のヨハン・バプティスト・ヴェンドリング、オーボエ奏者のフリードリヒ・ラム、歌手のアントーン・ラーフ。モーツァルトは彼らに協奏曲や四重奏曲などを作曲している。モーツァルトが父に送った手紙によると、「実にすばらしく強力な」マンハイム宮廷楽団の編成は、「左右両側にヴァイオリン 10 ないし 11、ヴィオラ 4、オーボエ 2、フルート 2 にクラリネット 2、ホルン 2、チェロ 4、ファゴット 4 にコントラバス 4、それにトランペットとティンパニ」と伝えている（1777 年 11 月 4 日）。また、「ああ！ぼくらもクラリネットを持てたらなあ！――シンフォニーが、フルートとオーボエとクラリネットを伴ったらどんなにすばらしい効果をあげるか、御想像になれないでしょう。」と、ザルツブルクの宮廷楽団にフルートとクラリネットがないことを嘆いている（1778 年 12 月 3 日）。そんな中、モーツァルトが歌劇場のプロンプターで写譜を業としていたフリードリーン・ヴェーバー（作曲家カール・マリア・フォン・ヴェーバーの伯父）と知り合うのに時間はかからなかった。1778 年 1 月 17 日に父に宛てた手紙によると、モーツァルトがキルヒハイムボーランデンに住む「声楽のただならぬ愛好家」であるオランニエ公妃のところに行く際、ヴェーバーとその娘アロイージアを同行させている。

*アリアの写譜はそれほど費用はかからないでしょう。ぼくといっしょに行くヴェーバーさんというひとが写してくれるからです。彼の娘さんについてもう書いたかどうか知りませんが――彼女はほんとうにまったくすばらしく歌をうたいます。そして美しい澄んだ声をしています。彼女に不足しているのは演技力だけで、それさえあれば、どんな劇場でもプリマ・ドンナになれるでしょう。彼女はやっと 16 歳になったところです。・・・（中略）・・・デ・アミーチスのためのぼくのアリアはおそろしくむつかしいパッセージがいくつもあるのですが、彼女は見事に歌います。キルヒハイムボーランデンでも彼女は歌います。彼女は自分自身を教えることも上手です。伴奏もまったくうまくて、小曲ならけっこう弾きます。*

2 月 4 日付けの手紙には、キルヒハイムボーランデンの宮廷でのコンサートの模様を伝えている。

*ヴェーバー嬢は 3 曲のアリアを歌いました。彼女の歌について言えば、ただ、素晴らしい！のひとことにつきます。――彼女の長所については、そう、こないだの手紙で書きましたね。でも、彼女についてもっと書かないことには、この手紙を終えるわけにいきません。というのも、今度はじめて彼女を知ったからで、その結果、彼女の全力量を見抜けたのです。・・・（中略）・・・次の日、月曜日にはまた音楽がありました。火曜日も水曜日も。ヴェーバー嬢は全部で 13 回歌い、2 回クラヴィーアを弾きました。・・・（中略）・・・ぼくはこの苦境にある家族が大好きなので、なんとか彼らをしあわせにしたいと、そればかり願っています。そして、きっとしあわせにできます。ぼくの忠告は、彼らがイタリアにいくことです。そこでお願いがありますが、ぼくらの親しい友人ルジアーティに、早ければ早い方がいいのですが、お父さんから手紙を書いて、ヴェローナではプリマ・ドンナにどれくらいギャラが出るのか、最高いくらか、問い合わせていただけませんか？・・・（中略）・・・ぼくらが彼らとザルツブルクへ同行できたら、本当にうれしいと言えます。デ・アミーチスのために書いたぼくのアリアや、「私はゆく、私は急ぐ」とか「小暗い淵から」のような華やかな技巧のアリアを、彼女はすばらしく歌います。お願いですから、ぼくらがイタリアに行けるよう、最善をつくしてください。*

モーツァルトはパリにいくどころか、貧乏暮しをしていたアロイージアをイタリアに連れて行き、そこでプリマ・ドンナにしたい、イタリアに行く途中ザルツブルクに立ち寄り、彼女の歌を聴かせたいと、父に手紙を書いている。このモーツァルトの手紙に母親が追伸を記している。

*いとしいあなた。この手紙からお分かりになるでしょうが、ヴォルフガングは新しく知り合いになると、すぐにも一切合財を、こうした人たちにあげてしまおうとするのです。その娘がとても素晴らしく歌うのは本当ですが、自分自身の利害関係をけっしてないがしろにしてはいけません。・・・(中略)・・・あの子が食事をしているので、これをほんとにこっそりと、それに急いでかいていますが、見つけられないためです。*

さらに、モーツァルトは2月7日付けの父への手紙でアロイージアにプレゼントするためにアリアを送ってもらえないか頼んでいる。

*前便で、ヴェーバー嬢の最大の長所を書き忘れていました。それは、彼女が素晴らしいカンタービレ歌いであるということです。お願いですからイタリアのことを忘れないでください。ぼくはこのかわいそうな、でも健気なヴェーバー嬢を、心の底から、イタリア人がよくいうように熱い思い(カルダメンテ)であなたに推薦します。ぼくは、彼女にデ・アミーチスの 3 つのアリア(キルヒハイムボーランデンの宮廷で演奏した、歌劇『ルーチョ・シッラ』KV 135より第4曲「小暗い淵から」、第11曲「ああ、いとしいひとのむごい危険を」、第16曲「私はゆく、私は急ぐ」の3曲)、ドゥーシェク夫人のためのシェーナ(レチタティーヴォとアリアおよびカヴァティーナ『ああ、私は前からそのことを知っていたの！―私の眼の前から消え去っておくれ―この波を超えて行かないでください』KV 272)、そして**『牧人の王』**の 4 つのアリア(第 2 曲「森に、牧場に、泉に」、**第3曲「穏やかな空気と晴れた日々」**、第 8 曲「むごいおひとよ、ああ！私をごらんなのね」第 10 曲「あのひとをぼくは愛そう」この最後のアリアにはアロイージアのために書かれた 3 つのカデンツァが残されている。)を渡しました。ぼくはまた、数曲のアリアを家から送ってもらうことを彼女に約束しました。お父さんが好意をもって、それらをぼくに送ってくださることを期待しています。ただし、無料で。どうぞお願いですから本当によい仕事をなさってください。アリアの一覧表は彼女のお父さんが写譜してくれたフランス語歌曲の上にあります。その紙はかれからのプレゼントです。*

これを読んだレーオポルトは、激怒し、すぐにパリに向けて出発するよう、2 月 12 日にかなり長い手紙をしたためる。

*愛する息子よ！4 日付のおまえの手紙を、私は驚きうろたえながら読み終えました。今日、11 日に、この手紙に返事を書き始めました。私は一晩じゅう眠ることができなかったし、とても疲れているので、一語一語ほんとうにゆっくりと書き、明日までにこれを少しずつ仕上げなければなりません。・・・(中略)・・・ヴェーバー嬢がガブリエーリのように歌い、イタリアの劇場にむく張りのある声などを持っていて、プリマ・ドンナにふさわしく成長していることなどは認めよう。――ただ、その娘の演技がうまく行っていると思っているのは笑止千万だ。・・・(中略)・・・舞台にまだいちども立ったことがない 16 か 17 の小娘を推薦したいといったら、笑わない興行師がいるだろうか？・・・(中略)・・・おまえの手紙はまるで小説のような書きぶりだ。・・・(中略)・・・パリで名声とお金を得なさい。そうすればおまえは、お金さえあれば、イタリアに行けるし、またそこでオペラを書くこともできる。興行師に手紙でやりとりしても難しいだろう。私もそれをずっとやってはみるが。そうしたらおまえはヴェーバー嬢のことを推薦できる。直接口で話すほうがずっといろんなことがやれるのです！・・・(中略)・・・ナンネルはこの 2 日間、おまえたちのために泣いてばかりいました。*

それに対して、モーツァルトは2月19日にヴェーバー家とのイタリア旅行を断念することを伝える。と同時に、2月7日、2 月 13 日に父に書き送ったことを再度お願いしている。それは、ヴェーバー嬢の練習に役立つので、以前に書いたカデンツァや装飾音を全部書き出したアリア・カンタービレを一覧表にまとめたのでそれを送ってほしいという願いだった。2 月 22 日、2 月 28 日、3 月 11 日付けの手紙にもこのことが触れられていることから、モーツアルトは、すっかりアロイージアに惚れ込んだらしい。それに対して、ザルツブルクのレーオポルトとナンネルが家じゅうアリアを探し回っていることを伝える2

月 26 日付けの父からモーツァルトへの手紙は、実にほほえましい。モーツァルトはザルツブルクからアリアが届くのを待ち切れず、アロイージアのために**レチタティーヴォとアリア「アルカンドロよ、わしはそれを告白する ― わしは知らぬ、この優しい愛情がどこからやってくるのか」 変ホ長調 KV 294** を作曲する。2 月 24 日のことだった。この曲は、もともとテノール歌手のラーフのために作曲されたことが、2 月 28 日付けの父への手紙に記されている。

*ぼくはバッハによって実にすばらしく作曲されている「どこから来たのかわしにはわからない」云々のアリアも、練習のために書きました。・・・(中略)・・・このアリアは、初め、ラーフのために書いたのですが、その冒頭部はラーフには高すぎるとすぐに気づきました。そして、彼のために改めるにしてはその部分がとても気に入っていたし、楽器編成の点からみても、ソプラノのためのほうがよりふさわしいように思われました。そこで、このアリアはヴェーバー嬢のために書こうと決めました。・・・(中略)・・・これはアンダンテ・ソステヌートです(前に小さなレチタティーヴォがあります)。中間部に第 2 節「この胸に目覚める」がきて、再びソステヌートに戻ります。曲が完成したとき、ぼくはヴェーバー嬢に言いました。「このアリア、自分で勉強してごらんなさい。自分の趣味で歌ってみることです。そのあとぼくに聴かせてください。そのあとで、ぼくの気に入ったところと、気に入らなかったところを、素直に言いましょう。」2 日後に行ってみると、早速、彼女はぼくに歌ってくれました。しかも彼女自身の伴奏で。ところが、彼女はまさにぼくが望んでいた通りに、まさにぼくが教えようと思っていた通りに、ぴったりと歌ったことを認めざるをえませんでした。これはいまや彼女のレパートリーのなかでいちばんいいアリアで、この曲なら、どこへ持っていこうと、彼女の名誉となることは請け合いです。・・・(中略)・・・もしまだアリアを郵送していないなら、どうぞできるだけ早く送ってください。そうなれば、本当にうれしいな。*

3 月 7 日付けの父への手紙にアロイージアの演奏に関する大変興味深い記述がある。

*アリアのことで大変お骨折りいただいたことを、とても感謝しています。・・・(中略)・・・あなたの御苦労やかずかず奔走してくださったことを、後悔なさることはありません。ヴェーバー嬢は確かにそれだけに値するものですから。ぼくはただ、最近お知らせした新しいアリアを彼女が歌うのを聴いていただきたかっただけです。彼女が、と言うのは、この曲はまったく彼女のために書かれたからです。あなたのように、ポルタメントをかけて歌うことはどういうことかわかっているひとなら、きっと充分に満足なさるでしょう。*

ポルタメントは、ある音から次の音に移るときに連続的に音程を変える奏法である。実際にアロイージアがどのような演奏をしたのかはわからないが、ハインリヒ・クリストフ・コッホの「音楽辞典(1802 年)」によると、当時のポルタメントの定義は「カンタービレの楽章において、音の抑揚にいくぶん柔軟性を持たせて歌うこと。言葉で説明するより、実際に聴いたり、演奏したりするほうがやさしい」とあり、何とも分かりにくい定義である。モーツァルトによると、ガブリエーリはコロラトゥーラの楽句と装飾音の技巧家だが、4 回以上は続かないので長く楽しませることはない。全音符を持続することもできないし、メッツァ・ディ・ヴォーチェ(一定の音を持続しながら音量を次第に高め再び弱くする奏法)がない。要するに技巧で歌っているだけで知性がない。それに比べ、アロイージアは心に歌いかけ、カンタービレを最高に好んで歌うことができる。と 2 月 19 日付けの父への手紙で述べている。KV 294 のアリアはポルタメントやメッツァ・ディ・ヴォーチェで装飾されたカンタービレで歌われたことは確かなようである。カンタービレは通常、「歌うように」と定義される。レーオポルトのヴァイオリン奏法にも「カンタービレは歌うようにの意味。つまり、歌の様式を生み出すよう努力しなければならないということです。もちろん、あまり人工的であってはなりませんが、楽器が可能な限り、歌うことを模倣するよう弾かなければなりません。これは、音楽の中でもっともすばらしい美です。」と定義されている。歌唱の場合、「カンタービレを歌う」とはどういうことなのか。モーツァルトはラーフを「華麗な技巧曲や経過句、急速な走句は素晴らしいが、カンタービレでは誇張しすぎる」と評している。ザルツブルク宮廷楽団のバス歌手のマイスナーについては、「わざと声を震わせる悪い癖があり、実に嫌らしく自然に反して

いるが、本当のカンタービレとなると、ラーフよりマイスナーの方がお気に入りだ（彼もまた過剰なので、完全に気に入っているわけではないが）」と1778年6月12日付けの父への手紙で述べている。カンタービレとは「歌うように、流れるように」よりむしろ「心をこめて歌う、過剰にならず自然体で」ということなのだろうか。モーツァルトがアロイージアにレッスンをした形跡が楽譜に残っている。演奏者が自由に装飾音を施して演奏するのが当時の習慣だったので、作曲者が完全な形で装飾音を書き出すことはほとんどなかったが、モーツァルトはアロイージアのために最初のアンダンテ・ソステヌートにオリジナルの楽譜に加えて装飾音を全部書き出した楽譜を作成している。アレグロ・アジタートに続いて再現される 2 回目のアンダンテ・ソステヌートはオリジナルの楽譜しか作成されていないところをみると、2 回目の修飾はアロイージアに自由に考えさせたのではないだろうか。モーツァルトがアロイージアに「このアリア、自分で勉強してごらんなさい。自分の趣味で歌ってみることです。そのあとぼくに聴かせてください。そのあとで、ぼくの気に入ったところと、気に入らなかったところを、素直に言いましょう。」と言ってこの楽譜を手渡したことは、先に述べた。モーツァルトが父に「アロイージアの勉強のために以前に書いたカデンツァや装飾音を全部書き出したアリア・カンタービレ」を送ってほしいと依頼したのは、ヨーハン・クリスティアン・バッハのオペラのアリアのカデンツァ集やナンネルが歌劇『ルーチョ・シッラ』の第 14 曲チェチーリオのアリア「ああ，私の残酷な運命が」のカデンツァや装飾音を全部書き出したものであった。KV 294 のアリアは、1783 年 3 月 11 日ヴィーンのブルク劇場で行われた演奏会でもアロイージアにより歌われたが、その際、2 回目のアンダンテ・ソステヌートについても、装飾音を全部書き出した楽譜がモーツァルトにより作成された。4 月 12 日にこの楽譜を父に送っている。これらのプロセスは、コンスタンツェがハ短調ミサの「クリステ・エレイソン」を歌えるように作曲した「わが愛するコンスタンツェのために」練習曲ソルフェッジョ KV 393 (385b)を作曲した経緯とよく似ている。この練習曲にはフェルマータのところで歌われるアインガンク（即興的なパッセージ）が全部書き出されている。

1778 年 3 月 24 日、モーツァルトは、母と共に無事パリに到着したことをザルツブルクの父に伝える。その手紙に 3 月 12 日にカンナビヒ邸でお別れ演奏会が行われたことが記されている。

*ぼくらは 14 日、土曜日に出発したわけですが、その前の木曜日の午後、カンナビヒ邸で演奏会があり、ローザ・カンナビヒ嬢が第一を、ヴェーバー嬢が第二を、そして（わが家の妖精）ピエロン・ゼーラリウス嬢が第三を弾きました。三回練習して、とてもうまく行きました。ヴェーバー嬢はぼくのアリアを二曲歌いました。『牧人の王』から「穏やかな大気」と新しい曲『わしは知らぬ、どこからやってくるのか』でした。*

3 月 12 日、カンナビヒ邸で行われたお別れ演奏会は、モーツァルトの交響曲『牧人の王』やカンナビヒの交響曲、アロイージアの独唱による 2 曲のアリアのほか、3 台のクラヴィーアのための協奏曲が演奏された。独奏を務めたローザ・カンナビヒは当時 14 歳、アロイージア・ヴェーバーは 18 歳、ピエロン・ゼーラリウスは 15 歳だった。アロイージアは、2 曲のアリアを歌い終わると大喝采を浴びた。**交響曲『牧人の王』ハ長調 KV 208 + 102 (213c)**は、音楽劇「牧人の王」の序曲とそれに続くアミンタのアリアをオーボエ独奏に移植して第 1 楽章と第 2 楽章とし、フィナーレ KV 102 (213c)を新たに作曲して独立した交響曲に仕上げたものである。アロイージアが KV 294 のアリアと共に歌ったのは、**音楽劇「牧人の王」より第 3 曲 アミンタのアリア「穏やかな大気と澄み渡った日々」変ロ長調 KV 208** であった。

*ヴェーバー嬢は、ぼくへの思い出と、ささやかな感謝のしるしとして、二対のレース編みの袖飾りを心をこめて編んでくれました。・・・（中略）・・・別れるとき、みんな泣きました。ごめんなさい、でもあの場面を思い出すと、涙があふれてくるんです。ぼくといっしょに階段を下りてきて、玄関の戸口にたたずみ、ぼくが町角をまがるまで、ずっと「さよなら」を叫んでいました。*

モーツァルトは 3 月 14 日にマンハイムを発ち、3 月 23 日パリに到着した。かつて神童を大歓迎してくれたパリはすっかり変わってしまっていた。父からは知り合いを作り、旧交を新たにするために、せっせと訪問するように言われていたモーツァルトであったが、1778 年 5 月 1 日付けで父に宛てた手紙によると、ド・シャボ公爵夫人の邸を訪ねたときは、全然暖めていない、氷のように冷たい、暖炉もない大きな部屋で半時間も待たされ、やっと案内された部屋では、公爵夫人たちが 1 時間デッサンを続けていた。その間、モーツァルトはずっと待っていなければならなかった。見るも哀れなおんぼろピアノを弾き出したが誰も聴こうとしなかった。つまり、椅子やテーブルや壁を相手に演奏しなくてはならなかった、と伝えている。頼りにしていたグリム男爵も別人のようだった。そんな苦境の中、7 月 3 日午後 10 時 21 分、6 月 11 日に施された瀉血が原因で母親は亡くなってしまう。享年 57 歳だった。悲しみに打ちひしがれるモーツァルトは、父には、母が重態であると嘘を言い、大半はパリの音楽事情を伝える手紙を送って平静を装い、ザルツブルクのヨーゼフ・ブリンガー師には、母の死を伝えて父と姉を支えてくれるよう、頼んでいる。また、マンハイムに住むアロイージアの父、フリードリーン・ヴェーバーにも母親の死の当日に手紙を書いた（7 月 29 日付けのヴェーバーへの手紙に記載されている）が、これは失われてしまった。当時のモーツァルトが、父親とブリンガー師のほかに、内心の打ち明け相手としてフリードリーンを意識していたことがわかる。翌日、サン・トゥスタシュ教会で母親の葬儀が行われ、息子と、その友人である国王近衛軽騎兵隊トランペット奏者のフランソワ・エーナの立ち合いで埋葬された。

7 月 30 日、モーツァルトはアロイージアに手紙を書く。全文イタリア語で書かれた真面目で真剣なスタイルの手紙である。

*あなたがぼくに送ってくださったアリアへの装飾付き楽譜を、今回お送りできなかったことをお許しください。・・・（中略）・・・いま、ぼくはソナタ集が早く出版されることを望んでいます。――そして、その機会に『テッサーリアの民よ』(KV 316)も手にされるでしょうが、もうそれは半分出来上がっています。――もし満足していただけるなら――ぼくは満足しているのですが――この上なく仕合せといえるでしょう。――いずれにせよ、この劇唱をあなたがどう思われたか、知るよろこびが得られますように――なぜって、この曲はあなたのためだけに作られたのですから――ぼくはあなたの賛辞以外なにも望んではいません。・・・（中略）・・・もしあなたがすぐにぼくのアンドロメーダの劇唱『ああ、私は前からそのことを知っていたの！』(KV 272)に本気で取り組んでくれたら、どんなにかうれしいことでしょう。というのは、この劇唱はあなたにぴったりと合うでしょうし――それにあなたの名声を大いに高めること請け合いです。――ことに表現の点でお勧めしますが――歌詞の意味と力を細心に考え――アンドロメーダの境遇と立場に真剣にわが身を置いてみてください！――そして、その人物そのものであると想像することです。・・・（中略）・・・あなたがひとりで習得したアリア『わしは知らぬ、どこからやってくるのか』(KV 294)については、どこも直したり、改めたりするところはありませんでした。――あなたはぼくの望む趣味と唱法と表現法であの曲を歌いましたね、――そういうわけで、当然ぼくはあなたの能力と理解力に全幅の信頼を置いています。――要するに、あなたは有能です。――実に有能です。・・・（中略）・・・最愛の友よ！――あなたがこの上なく健康であるよう願っています。・・・（中略）・・・でも、ぼくにとっていちばん仕合せな心理状態、境遇は、あなたに再会して、心からあなたを抱擁する最高のよろこびが得られる日にあります。・・・（中略）・・・どうぞたびたびお手紙をください。――あなたのお手紙がぼくをどんなに喜ばせているか、とてもあなたには想像できないでしょう。・・・（中略）・・・あなたからの便りがすぐにも受けとれることを期待しながら、あなたの手に口づけし、心から抱擁します。*

4、5 日ごとに父親に手紙を送る筆まめなモーツァルトが、アロイージアに送った手紙で現存するのはこの一通のみである。アロイージアはアリアへの装飾付き楽譜をモーツァルトに送った（これは、添削式の通信教育だったのだろうか）とあることから、おそらく彼女からも手紙が来ていたと思われる。また、フリードリーンにも何通か送っていることが分かっているが、ほかの膨大な書簡が保管されているにも関わらず、なぜか紛失してしまっている。これは、モーツァルトの恋文に嫉妬を感

じた人物により廃棄されたのではないかと考えられている。

9 月 24 日、レーオポルトはモーツァルトに宛ててパリからザルツブルクに戻るための算段を書き送っている。その際、ヴェーバー家の消息を記している。

*マンハイムに寄るという考えは取りやめです。今月末には、まだ来ていないものも全部、もうミュンヒェンにやって来ます。ヴェーバー家に対して年棒 1000 フローリンというおまえの希望は実現しました。9 月 15 日付けでもうミュンヒェンからの報告をもらっていますが、ゼーアウ伯爵がヴェーバー嬢を 600 フローリンでドイツ語劇場に雇い入れました。これに父親の 400 フローリンを加えると 1000 フローリンになります。*

1777 年 12 月 30 日にバイエルン選帝侯マキシミーリアーン 3 世ヨーゼフが天然痘で亡くなり、1778 年 9 月にカール・テオドールはバイエルン選帝侯としてバイエルンを統治することになったため、マンハイム宮廷楽団と共にミュンヘンに移った。このとき、バイエルン宮廷演劇音楽総監督ヨーゼフ・アントーン・ゼーアウ伯爵はアロイージアをドイツ語劇場のメンバーとして採用したので、ヴェーバー一家はミュンヘンに引っ越すことになったのである。アロイージアのために家じゅう楽譜を探したり、ヴェーバー家の消息を知らせるといった父の行動から、モーツァルトのアロイージアへの恋を応援しようと考えていたことがうかがえる。それを裏付ける手紙がある。11 月 23 日に書かれた息子あての手紙である。

*おまえの頭をいっぱいにし、分別のある熟慮をすべておまえから妨げていることが二つあります。第一の主な原因は、ヴェーバー嬢に対する恋心です。それに対して、私はまったくのところ反対ではありません。彼女の父親が貧乏だった頃でもそうではなかったのだから、彼女がおまえを幸福に――おまえが彼女を幸福にではなく――してあげることができるいま現在、どうして私がそうであってはならないのだろうか？――それに彼女の父親も、この恋のことを知っていると私は推測せざるをえません。だってマンハイムの人たちがみんなそのことを知っているのだから。・・・（中略）・・・おまえが当地（ザルツブルク）で勤めをすれば、18 時間で行くことのできるミュンヒェンの近くにいるというチャンスが得られるのです。・・・（中略）・・・ヴェーバーさんと娘さんが当地に私たちを訪ねてきて、私たちのところに泊ることもできる。・・・（中略）・・・私の愛するヴォルフガングよ！私はいつも、ヴェーバーさんはたくさんの同じような人たちのように、貧乏の時はおのれを取り繕い、そのあと幸せな境遇になっても自分のことがもう分からないといった人物だと思っています。彼がおまえに媚びへつらったのは、おまえが必要だったからです。――たぶん彼は、おまえが娘さんになにか教えてあげたり、勉強を見てあげたとは、いまはけっして認めないでしょう。貧乏だった人たちは、もし彼らが順境となると、けっこう威張りだすのが通例なのです。*

9 月 26 日、パリを発ったモーツァルトは 10 月 14 日前後にストラスブールに到着。そこからアロイージアが住むミュンヘンに行かず、わざわざ遠回りしてマンハイムに行った。1 か月ほどマンハイムで過ごした後、12 月 9 日、マンハイムを出発し、カイザースハイムを経てアロイージアが住むミュンヒェンに到着した。12 月 25 日クリスマスだった。父の予想は的中した。アロイージアはモーツァルトをはるかにしのぐ名声と収入を得ていた。彼女は見込みのない貧乏なモーツァルトを侮辱的な冷たさで迎えたのであった。12 月 29 日に父宛ての手紙が書かれる。

*この手紙はベッケ氏の家で書いています。――おかげさまで 25 日に当地に無事につきました。でもいままでどうしてもお手紙が書けませんでした。――いずれまたじかに会ってお話しする仕合せと楽しみが持てるなら、それまで全部取っておきます。――きょうはただ泣きたいだけです。――ぼくのこころはあまりに感じやすいのです。・・・（中略）・・・生まれてこのかた、今回ほどへたに書いたことはありません。書けないのです。――ぼくの心はいまにも泣きだしそうです！――すぐに手紙を書いて、慰めてください。局留めに出すのが一番いいと思います。――それだと自分でとにかく取ってこられますから。――*

*ぼくはヴェーバーさんの家に泊っています。――でもお手紙はぼくらの親友ベッケに宛てた方がよいでしょう、いや一番いいと思います。*

同じ日、フルート奏者のヨハン・バプティスト・ベッケからもレーオポルト宛てに手紙が出されている。それによると「1 時間もモーツァルトを泣きやめさせることができなかった」とある。レーオポルトはすぐさまモーツァルトに返事を書いている。大晦日の朝 5 時になっていた。

*私はおまえをよろこんでこの腕に迎え入れることだろう。――私はこの手紙を書きながら、ほとんど気が狂いそうです。*

1779 年 1 月 8 日、パリで書き始め、アロイージアに捧げるつもりだったアリア、**レチタティーヴォとアリア「テッサーリアの民よ ― 不滅の神々よ、私は求めはしない」ハ長調 KV 316 (300b)** の楽譜に完成の日付が入れられる。モーツァルトはどんな気もちだっただろうか。1 月 15 日、1 年 4 カ月にわたる旅行を就職失敗、母親の死、失恋で終え、ザルツブルクに戻った。

ゲオルク・ニーコラウス・ニッセンがモーツァルトの手紙を中心に編んだ「モーツァルト伝」(1828 年)に、モーツァルトの失恋の様子が記されている。「モーツァルトは母親の喪のために、フランスの風習に従って真っ赤な上着に黒の小さなボタンといういでたちで、パリからの帰途立ち現われたものの、アロイージアが彼に対して心変わりをしているのが分かったのであった。彼が入ってきたとき、彼女には自分がかつてその人のために泣いた人物がもう分からないようであった。そこでモーツァルトはクラヴィーアのところに飛んでいって、声高に歌ったのだ。『ぼくを好いてくれぬ娘っ子なんか喜んで捨ててやるさ。』」モーツァルトの死後、未亡人となったコンスタンツェはニッセンと再婚した。ニッセンが書いた「モーツァルト伝」は、コンスタンツェの回想が基本になっていることは言うまでもない。モーツァルトはなぜ、ストラスブールからアロイージアの住むミュンヘンに行かずにマンハイムに行ったのか。これまで出版されたモーツァルトの伝記では、アロイージアの住むマンハイムに行ったが、アロイージアはマンハイムにはおらず、ミュンヘンに移り住んでいることがわかったのでミュンヘンに向かったと説明されていることが多い。しかし、事実はそうではない。モーツァルトが 1778 年 10 月 15 日にストラスブールから父に宛てた手紙に、「アロイージアがミュンヘンに移住したことを伝える 9 月 24 日付の父からの手紙をたしかに受け取った」と記載されているからである。この手紙に、アロイージアのことが記載されている。

*ぼくは彼女のお父さんから、ミュンヘンへ彼が立つ前日にお急ぎで書いた手紙をもらいました。――そのなかで、彼はまたこんな知らせを報告しています。――かわいそうに、みんなはぼくのことを大いに心配していたのです。――彼らはぼくが死んだと思ってたわけですが、その理由は丸ひと月ぼくからの手紙がなかったからです。というのは、ぼくからの前々便が紛失してしまったためで、――ぼくのなきお母さんが遺伝性の病気で亡くなったというマンハイムでの噂があるだけに、彼らはいっそううその考えに確信をもったのです。かれらはもうみんなでぼくの霊魂のためにお祈りを捧げ、――あのかわいそうな娘は、毎日カプツィーナー教会へ行っていました。――お笑い草ですって？――とんでもない。ぼくは感動しました。どうしようもなく。――*

マンハイムからミュンヘンに向かう途中カイザーハイムから、12 月 23 日、アウグスブルクに住む従妹(ベーズレ)のマリーア・アンナ・テークラ・モーツァルトにミュンヘンに来て「大役を演じてほしい」と手紙を書いている。この大役は、アロイージアとの婚約の立会人ではないかと推測されているが、ひょっとしたら、失恋を予感したモーツァルトが、その時のために来てもらったのかもしれない。ストラスブールから直接ミュンヘンに行かず、マンハイムに立ち寄ったのも、手紙を送ってこないアロイージアの情報を音楽仲間から仕入れるためだったかもしれない。結局、ミュンヘンにやってきたベーズレは、失

恋したモーツァルトをザルツブルクに連れて帰るという大役を果たした。ベーズレがアウグスブルクに帰ったのは 5 月の初旬であった。

モーツァルトが 1784 年 2 月 9 日から記入を始めた自作全作品目録に、「1788 年 3 月 4 日、アリア ヘ長調 —— ああ恵み深い星々よ、もし天にあって、云々。ランゲ夫人(アロイージア)のために。伴奏。ヴァイオリン 2、オーボエ 2、ファゴット2、ホルン 2、ヴィオラとバス。」と記載されている。このアリア「ああ、恵み深い星々よ、もし天にあって」ヘ長調 KV 538 のテクストは、メタスタージョの『中国の英雄』第 1 幕第 2 場から採られている。恋の破局に直面した青年が、嘆き悲しむ曲である。この曲には、ソプラノのソロとバスラインのみによるパルティチェッラが残されている。アラン・タイソンによると、1788 年作曲と記載された総譜は、ヴィーンで使用された 12 段の五線紙であるのに対して、パルティチェッラには、ミュンヒェンの 10 段の五線紙が使用されている。また、ヴォルフガング・プラートによる筆跡研究の結果も考慮して、このパルティチェッラは、1778 年の年末、失恋した時期に作曲されたと推定した。何らかの理由で構想のまま放置してあった曲を 10 年後に手を入れて完成させたということになる。ロビンス・ランドンは、1788 年 3 月 4 日のエマーヌエル・バッハの『復活』再演の折に間奏曲として歌われたと推定している。

交響曲 第 33 番 変ロ長調 KV 319 は、1779 年 7 月 9 日、3 楽章の交響曲としてザルツブルクで完成した。メヌエットは 1784 年か 1785 年にヴィーンで追加され、1785 年、4 楽章からなる交響曲がアルターリアから出版された。

1779 年 9 月、アロイージアはヴィーンのドイツ国民劇場の歌手としてヴィーン宮廷に招かれ、ヴェーバー一家はヴィーンに移住することになる。10 月 23 日に父親のフリードリーンが亡くなり、未亡人となった母親のツェツィーリアは、長女のヨゼーファ(モーツァルトが 1791 年 9 月 30 日、歌劇「魔笛」 KV 620 を初演したとき、「夜の女王」役で出演した)、三女のコンスタンツェ、末娘のゾフィーを養うためにペーター広場の「神の目館」で貸間業を始める。アロイージアは俳優のヨーゼフ・ランゲと知り合い、1780 年 10 月 31 日に結婚した。一方、モーツァルトは、コロレード大司教の命で 1781 年 3 月 17 日、ヴィーンにやってきた。しかし、召使としての待遇に我慢が出来なくなったモーツァルトは、大司教とぶつかり、宿舎のドイツ館から退去命令がでた 5 月 1 日もしくは 2 日には、ヴェーバー家に身を寄せる。1781 年 5 月 16 日、モーツァルトが父に宛てた手紙にヴェーバー家の近況を伝えている。

*ランゲ夫人のときは、ぼくはばかでした。それはその通りですが、人間惚れ込んだら誰だってそうなるんじゃありませんか！——でも、実際ぼくは彼女を愛していました。そして、いまだに彼女がぼくにとって無関心な存在ではないのを感じます。——ただぼくに幸いなのは、彼女の夫がとんまな焼き餅焼きで、彼女をどこにも出さないので、めったに会う機会がありません。——ヴェーバー老夫人はとても世話好きなひとでぼくがその世話に対して充分お礼ができないでいることを信じてください。なにせその時間がないもんですから。——*

1781 年 6 月 8 日、アルコ伯爵に戸口から追い出されお尻に足蹴にくわせられて、ザルツブルクの宮廷から解雇された。これで晴れて自由の身になったモーツァルトのヴィーンでの活動が始まった。1782 年 7 月 16 日オペラ「後宮からの誘拐」が大成功し、8 月 4 日聖シュテファン教会で、モーツァルト(26 歳)はアロイージアの妹コンスタンツェ(19 歳)と結婚式を挙げる。アロイージアは出席しなかった。

1783 年 1 月 8 日に父に宛てた手紙で「1 月 11 日の土曜日にメールグルーベの大演奏会で義姉さんのランゲが歌うロンドを、今夜中に仕上げなくてはならない。」と伝えている。このロンドが、レチタティーヴォとアリア(ロンド)「わが憧れの希望よ！ — ああ、あなたには苦しみがどんなかおわかりにならないでしょう」 変ロ長調 KV 416 である。レチタティーヴォ

では、愛する妻と辛い別れを告げ、ロンドで、耐えがたい苦しみで心臓が張り裂けそうだと訴える。レチタティーヴォの開始はモーツアルトの絶筆となったレクイエム ニ短調 KV 626 の冒頭のテーマを連想させる。3 月 11 日にはブルク劇場でアロイージアが演奏会を開き、前述の通り、彼女は KV 294 のアリアを歌った。モーツァルトも出演し、交響曲第 31 番ニ長調「パリ」KV 297 (K300a)とクラヴィーア協奏曲第 5 番ニ長調 KV 175 に新作のロンド KV 382 を入れ替えて演奏した。3 月 23 日にはブルク劇場で皇帝御臨席のもとモーツァルトの演奏会が行われ、交響曲第 35 番ニ長調「ハフナー」KV 385 などが演奏された。アロイージアは、 KV 416 のアリアを歌った。

1783 年 6 月 21 日に父に宛てた手紙で「新しいイタリア語オペラが上演されることになり、ランゲ夫人のために 2 つのアリアを書かなければならない。」と伝えている。このオペラは、パスクワーレ・アンフォッシの『無分別な詮索好き』で 6 月 30 日に上演された。6 月 20 日に完成した**アリア「私はあなた様に明かしたい、おお、神よ」 イ長調 KV 418** は、許されない恋の苦しみを一人で悩む歌のあと、自分から遠ざかってほしいと激しく訴える。もう一曲は、**アリア「いいえ、いいえ、あなたにはできません」 ハ長調 KV 419**。このアリアも、「いいえ」を 3 回繰り返したあと、私はあなたを今まで愛していましたが、もう帰ってほしいと懇願する。7 月 2 日に父に宛てた手紙によると、「モーツァルトがアンフォッシのオペラを改作しようとしている」という噂が広まったので、モーツァルトはローゼンベルク伯爵に使いをやり、「36 ページと 102 ページの 2 つのアリアは、マエストロ・モーツァルト氏によって、ランゲ夫人の気に入るように作曲されたものである。なぜなら、マエストロ・アンフォッシ氏のアリアは、彼女の声にではなく、別の歌手に合うように書かれているからである。しかるべき人に敬意を表し、このきわめて高名なナポリ人の評判と名声をけっして傷つけることのないよう、御注意いただきたい。」という声明文をドイツ語とイタリア語の両方で台本に印刷しないかぎり、アリアを渡さないと伝言した。モーツァルトは、自分を陥れるために悪い噂を流したのはサリエーリの仕業に違いないと述べている。

アロイージアは、1795 年、ランゲと離婚。1829 年 7 月 23 日、ロンドンのノヴェロ夫妻が、晩年のアロイージアをヴィーンに訪問したときの、メアリー夫人の日記が残っている。

*モーツァルトは死ぬまで私を愛してくれましたので、正直に申しますと、そのために妹は少し嫉妬しているのではないかしら。私がランゲ夫人に、どうしてモーツァルトの求婚を断ったのですか、と尋ねますと、彼女の答えは――わかりませんわ、二人の父親とも賛成でしたが、私はあの頃どうしても彼を愛することができなかったのです。彼の才能と愛すべき人柄がわかっていなかったのですね。後で私はとても後悔しましたわ。妹の方が賢かったのです。*

その後、アロイージアは生活に困窮したため、裕福な枢密院顧問官の未亡人だった妹のコンスタンツェ（モーツァルトの死後、デンマークの外交官ゲオルク・ニーコラウス・フォン・ニッセンと再婚した。）を頼り、1839 年 6 月 8 日にザルツブルクでその生涯を閉じた。

（2012 年 9 月 19 日）

【参考文献】


1. Hermann Beck: Wolfgang Amadeus Mozart, Sinfonie in C (Ouverture zu KV 208 und KV 102/213c), Bärenreiter Verlag (1957)
2. Pierluigi Petrobelli, Wolfgang Rehm: Wolfgang Amadeus Mozart, Bühnenwerke, Werkgruppe 5: Il re pastore, Bärenreiter Verlag (1985)
3. Stefan Kunze: Wolfgang Amadeus Mozart, Bühnenwerke, Werkgruppe 7: Arien, Szenen, Ensembles

und Chöre mit Orchester, Bärenreiter Verlag (1968)
4. Marius Flothuis: Wolfgang Amadeus Mozart, Konzert in F für drei bzw. zwei Klaviere und Orchester (Lodron-Konzert) KV 242, Bärenreiter Verlag (1972)
5. Christoph-Hellmut Mahling: Wolfgang Amadeus Mozart, Sinfonie in B KV 319, Bärenreiter Verlag (1970)
6. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologish-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts 8. Auflage, Breitkopf & Härtel (1983)
7. Frederick Neumann: Ornamentation and Improvisation in Mozart, Princeton University Press (1986)
8. Neal Zaslaw: Mozart's Piano Concertos – Text, Context, Interpretation, The University of Michigan Press (1996)
9. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989)
10. Alan Tyson: Mozart, Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press (1987)
11. オットー・エーリヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本晌二 訳:ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア(1989)
12. 久本祐子:モーツァルトはどう弾いたか, 丸善ブックス(2000)
13. 大宮眞琴:ピアノの歴史, 音楽之友社(1994)
14. 伊東信宏 編:ピアノはいつピアノになったか？, 大阪大学出版会(2007)
15. ロバート・ルイス・マーシャル 編, 高橋英郎, 内田文子 共訳, モーツァルトは語る, 春秋社(1994)
16. レーオポルト・モーツァルト, 塚原哲夫 訳:バイオリン奏法, 全音楽譜出版社(1974)
17. エヴァ＋パウル・バドゥーラ＝スコダ, 渡辺護 訳:モーツァルト 演奏法と解釈, 音楽之友社(1963)
18. ネリーナ・メディチ・ディ・マリニャーノ, ローズマリー・ヒューズ 共編, 小池滋 訳:モーツァルト巡礼 1829年ノヴェロ夫妻の旅日記(抄訳), 秀文インターナショナル(1986)
19. カローラ・ベルモンテ, 海老沢敏, 栗原雪代 共訳:モーツァルトと女性, 音楽之友社(1974)
20. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集III, 白水社(1987)
21. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集IV, 白水社(1990)
22. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集V, 白水社(1995)
23. 海老沢敏, 高橋英郎, モーツァルト書簡全集VI, 白水社(2001)

《Programm》

W. A. モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart
(1756 - 1791)

Sinfonia C-Dur KV 208 + 102 (213c) „Il re pastore“ (1775)
交響曲「牧人の王」ハ長調 KV 208 + 102 (213c)

I. Molto allegro
II. Andantino
III. Presto assai *(KV 102 /213c)*

„Il re pastore“ KV 208: No. 3 Aria B-Dur „Aer tranquillo e dì sereni“ (Aminta) (1775)
音楽劇「牧人の王」より 第 3 曲 アミンタのアリア「穏やかな大気と澄み渡った日々」変ロ長調 KV 208

Allegro aperto – Grazioso – Allegro (*Tempo primo*)

Rezitativ und Arie für Sopran und Orchester Es-Dur KV 294 „Alcandro, lo confesso“ - „Non sò d'onde viene“ (24. Februar 1778)
ソプラノと管弦楽のためのレチタティーヴォとアリア「アルカンドロよ、わしは告白する」ー「わしは知らぬ、このやさしい愛情がどこから来るのか」変ホ長調 KV 294

Recitativo: Andantino – Andante – Andantino
Aria: Andante sostenuto – Allegro agitato – Primo tempo

Konzert für zwei klaviere und Orchester Nr. 7 F-Dur „Lodron-Konzert“ KV 242 (1776/1780)
2 台のピアノと管弦楽のための協奏曲 第 7 番 ヘ長調【ロードゥローン協奏曲】KV 242

I. Allegro
II. Adagio
III. RONDEAU: Tempo di Minuetto

・・・・・ 休憩 Pause ・・・・・

Rezitativ und Arie für Sopran und Orchester C-Dur KV 316 (300b) „Popoli di Tessaglia! “ - „Io non chiedo, eterni Dei“ (8. Januar 1779)
ソプラノと管弦楽のためのレチタティーヴォとアリア「テッサーリアの民よ！」ー「不滅の神々よ、私は求めはしない」ハ長調 KV 316 (300b)

*Recitativo*: Andantino sostenuto e languido
Aria: Andantino sostenuto e cantabile – Allegro assai

Arie für Sopran und Orchester F-Dur KV 538 „Ah se in ciel, benigne stelle“ (4. März 1788)
ソプラノと管弦楽のためのアリア「ああ、恵み深い星々よ、もし天にあって」ヘ長調 KV 538

Allegro

Sinfonie Nr. 33 B-Dur KV 319 <1. Fassung> (9. Juli 1779)
交響曲 第 33 番《第 1 版》変ロ長調 KV 319

I. Allegro assai
II. Andante moderato
III. Allegro assai

Rezitativ und Arie (Rondo) für Sopran und Orchester B-Dur KV 416 „Mia speranza adorata!“ - „Ah, non sai qual pena sia“ (8. Januar 1783)
ソプラノと管弦楽のためのレチタティーヴォとアリア（ロンド）「わが憧れの希望よ！」－「ああ、おまえは知らないのだ、その苦しみがどんなものか」変ロ長調 KV 416

*Recitativo*: Andante – Adagio – Allegretto – Andante – Allegro assai - Adagio
*RONDEAU*: Andante sostenuto – più andante – Allegro assai – Primo tempo – Allegro assai

Arie für Sopran und Orchester A-Dur KV 418 „Vorrei spiegarvi, oh Dio!“ (20. Juni 1783)
ソプラノと管弦楽のためのアリア「私はあなた様に明かしたい、おお神よ！」イ長調 KV 418

Adagio – Allegro

Arie für Sopran und Orchester C-Dur KV 419 „No, che non sei capace“ (Juni 1783)
ソプラノと管弦楽のためのアリア「いいえ、いいえ、あなたにはできませぬ」ハ長調 KV 419

Allegro – Allegro assai